『エレックとエニッド』私注

目黒士門

まえがき

フランス文学の歴史が始まってから，およそ100年の歳月が流れた12世紀の後半，クレチヤン・ド・トロワ Chrétien de Troyes (1135頃—1190以前〔G. Cohen 説〕) という1宮廷詩人の手によって，ヨーロッパ文学史の中に珠玉のごとき光彩を放つ一連の長編物語が生み出された。すなわち，『エレックとエニッド』*Erec et Enide* (1170〔S. Hofer, A. Fourrier 説〕)，『クリジェス』*Cligès* (1176—1177〔A. Fourrier 説〕)，『ランスロ，または車上の騎士』*Lancelot ou le Chevalier de la charette* (1168頃〔G. Cohen 説〕，1177—1181の間〔A. Fourrier 説〕)，『イヴァン，またはライオンの騎士』*Yvain ou le Chevalier au Lion* (1177—81の間〔A. Fourrier 説〕)，『ペルスヴァル，または聖杯物語』*Perceval ou le Conte du Graal* (1181以後) などの作品群であり，この一連の物語によって，彼は新しいジャンルの確立者と呼ばれる栄誉を担うことになった。その新しいジャンルとは，≪小説≫の原型である Roman Courtois すなわち≪宮廷恋愛物語≫または≪騎士道物語≫である。

中世の騎士道物語は，西欧の古典文学を学ぶものにとって，「聖書」および「ギリシャ・ローマ神話」についで欠かすことのできないものである。にもかかわらず，わが国ではクレチヤン・ド・トロワの諸作品は，いまだ未紹介のまま取り残されている。そこで私はクレチヤン・ド・トロワの諸作品の訳業に着手したが，これまでの諸外国における研究成果によって作品を読む以上，訳業において遭遇する問題点に注釈をつけ解釈の根拠を示すことは不可欠の作業である。

本稿は『エレックとエニッド』の問題点を私注の形でまとめたものであるが，

浅学の私の力で取り扱い得る程度や範囲を考えて，あえて≪私注≫とした次第である。大方の寛大な理解を切望してやまない。

訳業のために用いたテキストは，*Les Romans de Chrétien de Troyes édités d'après la Copie de Guiot, I, Erec et Enide* publié par Mario Roques. Paris, Champion, 1968. である。

各項目の前に付した番号（ボールド体）は，このテキストによる行数表示である。

私注とその問題点

28 Quaradigan カラディガン。―― おそらくウェールズのカーディガン Cardigan を指す。アルチュール王の居城。

29 li roi Artus アルチュール王。――英名アーサーArthur。6世紀のウェールズの伝説上の王。アルチュールはローマ人の武将アルトリウス(Artorius)で，これが叙事詩的着色によってケルト人の英雄に変わったという説もあるが，歴史上の人物というよりは，やはり伝説上の人物であろう。アルチュール王伝説を集成したサー・トマス・マロリー Sir Thomas Malory（1471没）の『アルチュール王の死』Le Morte d' Arthur（1485）によれば，516年ブリトン人の王となったアルチュールは，アングロ・サクソン人の侵入に対する国民的反抗を指導し，520年ベイドン・ヒル Badon-Hill の戦いでこれを破り，侵入者が破壊したキリスト教を再興した。ついで，アイルランド，オークニー諸島，アイスランドまでも征服したという。その妃グニエヴル Guenievre（英名グウェナヴァーまたはギニヴィア Guinevere）とともにウェールズのカーリオン Caerleon に住み，騎士道の範となった有名な≪円卓の騎士団≫を擁してその広大な王国を平和裡に治めたが，最後にはアヴァロン島 Avalon で致命傷を負い，542年頃この島で生涯を終えたという。中世にはアルチュール王伝説に基いて数多くの物語が編まれた。≪円卓物語≫および≪聖杯物語≫がそれである。

29 ot li rois Artus cort tenue アルチュール王は宮廷を開いた。――こ

こでは「宮廷」cort は≪御前会議≫の意味であろう。「宮廷」は中世の騎士道物語では，（1）君主とそれに服従する家臣全体（2）その会議を指す。宮廷は，復活祭・昇天祭・聖霊降臨祭・降誕祭などの大祝日にしばしば開催され，そこに列席する人々も，王をはじめとして王妃・諸侯・身分高い騎士・貴婦人・高貴な家柄のおとめなどさまざまであった。宮廷の議題は，立法・司法・行政・軍事に関することばかりでなく，風俗や習慣，冠婚葬祭から美女の品定めに至るまで，あらゆる事柄が議題として取り上げられた。宮廷が開かれる場所も王の居城に限定されてはいなかった。しばしば土地を変えて開かれていた。宮廷の開催地が王の居城に限られてくるのは後の時代である。

37　le blanc cerf chacier 白鹿の狩をする。――Foerster によれば，騎士道物語にはしばしば復活祭の狩の記述がある。『フェルギュス』***Fergus*** においても騎士たちが白鹿の狩を行ない，ペルスヴァル Perceval が白鹿を仕止めるが，接吻の儀式に関する言及はない。

39　Mon seignor Gauvain　ゴーヴァン殿。――英名サー・ガーウェイン Sir Gawain. アルチュール王の甥に当たる。アルチュール王の姉（異父姉姉）モルグ Morgue とオークニーのロット王 Lot の子。アルチュール王の宮廷でもっとも名高い騎士の1人である。聡明で礼儀正しい騎士として描かれている。

83　de la Table Reonde estoit　彼（エレック）は円卓の騎士団に属していた。――アルチュール王麾下の騎士を≪円卓の騎士≫と言う。アルチュール王が魔法使いメルラン Merlin（英名マーリン）の助言のもとに創設したのが≪円卓の騎士≫である。アルチュール王物語における「円卓」とは，カルメリード Carmélide の王レオダガン Léodagan が娘グニエヴルとアルチュール王の婚礼に際し，アルチュール王に贈った円形のテーブルであり，周囲に150人の騎士がすわることができるという。しかし，諸伝説が混淆し，円卓はキリストの最後の晩餐の食卓と結びつけられたり（『聖杯物語』），あるいは太陽伝説（ケルト伝説）と結びつけられたりした。円卓に侍る騎士の数も一定していない。いずれにせよ，円卓はそこに侍る騎士たちの間に上下の差がないことを示

している。アルチュール王の騎士たちが名誉を求めて英雄的冒険に旅立つのは円卓からであり，冒険的騎士が戻って来て，ふたたび仲間と再会するのも円卓である。しかし，クレチヤン・ド・トロワは≪円卓≫の性状についてはまったく言及していない。おそらく彼にとっては，≪円卓≫は1つの制度的なものだったのであろう。なお，『エレックとエニッド』v. 1671—1706には円卓の騎士の名が列挙されている。

95　un mantel hermin アーミン皮のマント。—— アーミン皮はオコジョ（哺乳類・食肉目・イタチ科）の毛皮。柔らかくて光沢があり，きわめて良質かつ高価。中世ヨーロッパの王侯貴族が愛用した。

97—98　s'ot cote d'un dïapre noble/qui fu fez an Constantinoble コンスタンチノープルで織られた高価な花模様の絹の上衣を身につけていた。——dïapreは衣裳用または壁掛用の唐草模様または花模様の絹地。絹は古代中国の原産であるが，6世紀以前にはシルク・ロードと海路を通じてヨーロッパに運ばれていた。551年に初めて蚕が2人の僧侶の手でコンスタンチノープル（現在のイスタンブール）に伝えられたが，1130年にシシリー島の王ロジャⅡ世が絹織技術をパレルモ（シシリー島の首都）に伝えるまでは，絹織物の生産は東ローマ帝国に限られていた。やがて中近東から地中海沿岸にかけて絹の生産が開始されるが，このような歴史的背景から見てもわかるように，クレチヤンの時代には，コンスタンチノープルは絹生産の一大中心地であった。

99　chauces de paile ペール絹の下袴。——paile<lat. pallium は，衣裳用または室内装飾用の豪華な飾りつきの絹織物。この語は今日では poêle の形で用いられ，もっぱら葬儀の際の柩用掛布を指す。chauces は男性が用いた肌にぴったりつく長ズボン。英 double and hose の後者。

136　an un essart ある開墾地で。——essart は森の中の樹木を堀り起こして開墾された土地。フランスで散見される Les Essarts という地名は，この種の開墾地に由来している。

141　l'escu au col　楯を頸にかけ。—— 楯は裏側に取りつけてある革製の輪穴状の把手に前腕を通し，身に引き寄せて構えるが，行軍その他のときには

吊革または布製のバンド（楯綱）で頸に吊り下げた。

146 uns nains　小人（こびと）。——小人は発育不全で標準より背丈がいちぢるしく低い人を言うが，古くから怪奇または神秘的なものと見なされ，中世ヨーロッパでは飾りものとして珍重された。

159 l'anbleüre　側対歩。——馬が片側の２本の脚を同時に上げて進む歩法。乗り手に衝撃を与えない静かな歩法なので貴婦人は側対歩で歩む馬を好んで求めた。

210 Vasax　足軽よ。——vassal は封建時代の知行を受けた臣下。一般には≪勇敢な武将≫（vaillant guerrier）の意であるが，呼びかけに用いられると軽蔑の意味を帯びる。

313 li rois Ydiers　イデール王。——イデール王を題材とした物語を G. Paris が *Histoire littéraire de la France*, XXX. で紹介し，それは，のちに Heinrich Gelzer が *Der altfranzösische Yderroman* (Dresden, 1913) として公刊したが，Foerster によれば，古代フランス語の物語には，明らかに３人の同名の騎士がいる。『エレックとエニッド』では，ここに登場するイデール（v. 313）のほか，はいたかを競って敗れたイデール（v. 1042），円卓の騎士の中に名を連ねているイデール（v.1694）の３人がいるが，いずれも別人である。

315 li rois Cadiolanz　カドワロ王。——北ウェールズの歴史上の王。ここではアルチュール王の廷臣。

317 Kex　クゥー。——英名ケイ Kay。アルチュール王の宮廷の家令職（Sénéchal)。家令職とは王の名において奉行人の監督・取締りに当たる役職。一般に騎士道物語の中では，家令職は貪欲と悪意から法を曲げる悪役人として登場するが，『エレックとエニッド』のクゥーは，いたずら好きな愉快な人物である。

317 Girflez　ジルフレ。——ドーDo の子であり円卓の騎士。のちにテヌブロック Tenebroc（英エジンバラ Edinburgh）の騎馬試合に登場する（v. 2174)。

345 chastel 城。——狭義では，王または領主の防備を施した住居を指す。ふつうヨーロッパ中世には，領主の住居を中心として周囲に臣下および町民の住む町があった。そして町全体が防備を施した城壁で囲まれ，いわゆる城下町を形作っていた。広義での chastel はこの城下町全体を指す。城内の臣下・町民の居住区域が bourg であり，城外の区域が faubourg(<fors borc, hors des murs) である。bourg の住民すなわち bourgeois は領主からかなり広汎な自由を保証されていた。町民の多くは商業に従事し，しばしばひじょうに富裕であった。

352 espreviers et faucons de mües 脱毛期のはいたかや鷹。——猟銃が出現する17世紀以前には鷹狩りが狩猟の重要な方法の一つとなっていて，そのために鷹類の飼育が盛んに行なわれていた。シャルルマーニュは国費で鷹匠を養成。とくに中世のヨーロッパでは貴族階級の娯楽と権勢誇示を兼ねて鷹の飼育が盛んであった。v. 352—354 に描かれているように，はいたか・おおたか・はやぶさなどが飼育されていた。v. 354に「羽毛が抜け変わった赤褐色のはやぶさやおおたか」とあるが，鷹の羽変わりには相当高度な技術を要したという。「赤褐色の」とは，鷹が若過ぎてまだ鷹狩りに向かないことを示す。

357 cil as eschas et cil as tables あるものは将棋にあるものは双六に興じている。——将棋は古代には知られていなかったもので，アラビア人によりペルシャから西欧に入ったが，その時代は不明。恐らく9世紀か。将棋は中世（とくに11世紀から13世紀にかけて）大流行を来たし，賭博の具に供され，しばしば教会の禁止するところとなった（G. Paris）。双六は，さいころと駒を用いて盤上に勝負するトリックトラック（trictrac）によく似たゲームで，古代から西欧にも伝えられていたという（いずれも有永弘人訳『ロランの歌』岩波文庫の後注による）。

375 vavasor 陪臣。——貴族の領地の所管に属する付属封土を受ける家臣。封建的身分階級の下級身分の一つであるが，もちろん自由民。騎士道物語では，陪臣は一般に貧しい人として登場するが，廉直かつ賢明で，つねに尊敬の念をもって語られている。

405　un blanc cheinse ot vestu desus　（おとめは）その上に白い仕事着を着ていた。——cheinse は，長い袖つきの寛衣（tunique）を言う。ふつうリンネルか絹でできていて，襟と袖口には刺繍の飾り縁がある。ここでは，それほどりっぱなものとは思えない。白いリンネルの袖つき仕事着であろう。

408　costez　肘。——costez は cotes の誤りであるように思われる。他の写本では coutes または keutes だが，Guiot の写本では costes。これは恐らく書法の誤りである。子音の前に s を加えることは Guiot の写本に見られる。語尾の s の代わりに z を用いることも同様である。v. 1549 は，この形が≪coudes≫（肘）の意味であることを証拠立てている（M. Roques による）。

424　Isolz la blonde　ブロンドのイズー。——言うまでもなくトリスタン Tristant 伝説の金髪のイズー Iseut を指す。クレチヤン・ド・トロワは，彼の作品の中でしばしばマルク Marc 王とトリスタンおよびイズーに言及している。このことは，クレチヤン自身が『マルク王と金髪のイズー』*Le Roi Marc et Yseult la blonde* を書いたという『クリジェス』*Cligès* の冒頭の彼のことばの信憑性を物語るものであろう。アングロ・ノルマンの詩人ベルール Béroul とトマ Thomas のトリスタンに関する物語の断章が今日に伝えられているが，彼らはクレチヤンの同時代人である。『エレックとエニッド』以前に，クレチヤンが失なわれた『トリスタン物語』を書いたとする Foerster の仮説は恐らく間違っていない。また，トリスタンとイズーの道徳上の逸脱に対する一種の文学的償いとしてクレチヤンはクリジェスとフェニス Fénice の愛を扱ったとする説も『クリジェス』における言及に照らして首肯できよう（W. W. Comfort による）。なお，騎士道物語における女性の髪の毛の描写については，Thomas Bulfinch, *The Age of Chivalry*（1858）の邦訳『中世騎士物語——騎士道の時代』（大久保博訳，角川文庫）pp. 449—450参照。

524　cuens　伯爵。——国王によって任命された地方総督であり，伯爵領地の領主。すでにコンスタンチヌス大帝（337没）の治世から，コメス(comes)の名称のもとに皇帝によって地方に派遣されていた高官が存在した。これが伯

爵（comte）の起原である。メロヴィング朝および西ゴートの諸王もこの制度を継承。カロリング朝時代には，伯爵は行政・司法・財政・軍事の権限を握る地方総督となった。大地主であり同時に広汎な権限を持った伯爵は，ついには自立するまでになった。877年，キエルスィ＝スユール＝オワーズKiersy-sur-Oise の法令は伯爵の称号の世襲権を承認した。この時から伯爵の称号は封建的階級制度のもっとも高い称号の一つとなった。すなわち，公爵・侯爵に次ぐものとなった。『エレックとエニッド』に登場する伯爵たちは，いずれもそうした強大な権力を持った城主であり地方領主である。

554 escuiers　従者。――英 esquire。騎士教育の最終段階の訓練を受ける若者。貴族の子弟は，ふつう7才で父親の家を離れ，将来の主君の宮廷で damoiseau（近習），page または varlet（小姓）として教育を受け始める。14才になると écuyer（従者または従騎士）に列せられ，武術を中心に将来，騎士となるに必要なあらゆる訓練を受け，21才で騎士に叙任された。

615 li haubers tresliz　環鎖（わぐさり）が3重になった鎖鎧（くさりよろい）。――鎖鎧（または鎖かたびら）というのは，環鎖（環状の鎖）でできた長衣で，騎士が戦闘のときに着た。全身を膝までおおうようになっていた。環鎖はたくさんの鉄の輪を繋ぎ合わせたもので全体が網の目のようになっていた。そのため鎖鎧は剣で切りつけても切れなかったが，槍で突くと槍の穂先が網目を破って肉に喰い込むことがあった。そこでこれを防ぐために鎖鎧の下に厚い胴着を着たり，さらにその下に鉄の胸当てをいれたりした。鎖鎧は，ふつう二重の環鎖でできていたが，ここでは三重になっている。

617 chauces　脛当（すねあて）。――≪下袴≫を意味する chauces（v. 99）と同じ語。甲冑の一部。下肢を保護するためのもので鎖鎧と同じように環鎖でできており，皮紐で結ぶ。

619 li hiaumes　兜。――わが国の兜とは異なり形は三角帽子かあるいはわが剣道の面に似ており，頭からすっぽりかぶる。鋼鉄でできており，顔面に当たる部分を「面頬（めんぼう）」（visière）と言い，1種の格子窓から相手をのぞき見ることができた。前方に兜の本体から突起した「鼻当て」（nasal）

とその下に「息抜き」(ventail または ventaille) がある。兜を頭に固定するため革紐で結んだ。

652 li Breton ブルトン人。——大ブリテン島およびアイルランドに移住した古代のアルモリカ Armorique（今日のフランスのブルターニュ Bretagne 地方）の民族。彼らは5世紀以後ふたたびアルモリカに戻った。

687 preuz ert et cortois 彼は雄々しく礼儀正しかった。——「雄々しい」と「礼儀正しい」は，12世紀と13世紀の騎士道物語の中でしばしば組み合わせて用いられる形容詞であった。とりわけ courtois は複雑な概念である。courtois（英 courteous）は≪宮廷≫を意味する cour（英 court）に由来し，複雑な意味を持っていた。広義では，あるいはもろもろの騎士道的行為を，あるいは洗練された社交上の礼譲を指すが，特殊化された意味では，ふつうの人には不可解な「宮廷恋愛」(amour courtois) の作法を指す。ここでは前者の意であるが，courtois であること，すなわち courtoisie は，ことば遣い・物腰・衣裳が洗練されていること，合戦においては正々堂々，他人の行為や感情に対して尊敬の態度を持っていること，生まれと思いの気高さによって平民の上に聳え立つ高貴な魂を持っていること，エリート的存在を愛好する精神を堅持することなどを含む。Marc Bloch が言ったように「courtoisie は本質的に階級問題である」。courtois, courtoisie は vilain（平民の，賤しい），vilenie（下賤）の正反対のものである。courtois は「宮廷」と切り離して考えることはできない。騎士すなわち「宮廷の英雄」(héros courtois) には必然的に courtoisie が求められた。なお，courtoisie が要求されたのは男子のみではない。白鹿の狩に際しエレックが供をしたグニエヴル王妃の腰元が courtoise であることは，v. 128に描かれている。

702 un hermite 隠者。——俗世を離れて孤独の生活をしている敬虔な人。隠者の起原は修道院制度の起原でもある。隠者聖ポーロ Saint Paul l'anachorète や聖アントワーヌ Saint Antoine, 聖マケール Saint Macaire が修道生活の創始者と見なされているが，多くの隠者たちは，彼らに倣って砂漠や森の奥で悔悛の生活を送った。中世には隠遁生活は多くの改宗者を作っ

た。隠遁生活はしばしば1種の贖罪だったのである。ヴェズヴィオ山やサント・ボーム Sainte-Baume の隠者たちは完全な孤独のうちに生活したが，カルメル山やアトス山の隠者たちは，共通な戒律のもとに共住修道士としての生活を送った。これらの隠者たちの集団から，カマルドリ会やアウグスチノ会のような修道会が形成された。

800　un arbalestier　弩（おおゆみ）。——台座に据えられた鋼鉄製の弓。殺傷力が非常に強かったので，第2ラテラノ公会議（1189年）は，これを禁止した。しかし，リシャール獅子心王 Richard Cœur de Lion とフィリップ・オーギュスト Philippe-Auguste はこの禁止を無視した。1214年のブーヴィーヌ Bouvines の戦いにおける勝利は弩の使用によるものである。弩の射程は200歩（150メートル）に達し，100歩（75メートル）以内では人を殺した。

865　un arpant　1アルパン。——約36メートル半の長さを表わす旧単位。面積にも用いられ約1エーカーを表わした。

936　la coisfe　球帽。——兜の下に冠る布製のまるい頭巾。

938　l'escu jusqu'a la bocle fant　楯を丸鋲まで切り裂き。——楯は，ふつう木で作られ，形は上方が広く下方が尖った縦長の逆三角形。外方に向かって湾曲し，馬上の騎士の身体を縦におおうほどの大きさがあった。時には木の板を二重にして堅牢なものにした。この材質の上に革を張り釘で留める。楯の縁には鉄製の枠をつけて，剣で切り裂かれるのを防ぐようにした。楯の中央には鉄製の丸鋲（突起）があり，かなり広い面積を占めていた。

940　un espan　1アンパン。——1当り。手の掌を平らに拡げたときの親指の先から小指の先までの距離。約22～24センチメートル。

959　un pié　1フート。——昔の長さの単位。約32.5センチメートル。

1030　set liues　7里。——1里（リュウ）は約4キロメートル。

1085　Es loiges de la sale hors　大広間の外側の廻廊には。——城郭または豪壮な館の最上階の展望台。外部へ向かって広い窓が開いている。木で造られていて外部へ張り出したものもあるし，石でできていてアーケード式の装飾が施されているものもある。この種の廻廊は12世紀に大いにもてはやされた。

1242　quant Tristanz ocist le Morhot　トリスタンがモロルトを殺したとき。――『トリスタンとイズー』の挿話。金髪のイズーの叔父に当たるアイルランドの巨人モロルト le Morholt は，5年ごとにトリスタンの叔父であるコルヌアイユ la Cornouaille（英名コンウオール Cornwall）のマルク王の宮廷に姿を現わし，貢物として若者と若いおとめをそれぞれ300人ずつ引き渡すことを要求した。しかし，マルク王の宮廷にはモロルトと渡り合えるほど強い騎士がいなかった。そこで，まだ騎士に任ぜられていなかったトリスタンは騎士の称号を授けて欲しい旨をマルク王に願い出るとともに，モロルトとの戦いに自分を出して欲しいと申し出た。こうして決戦に臨んだ若いトリスタンは深手を負いながらも，モロルトの頭蓋に激しい一撃を浴びせた。剣先は折れモロルトの頭の中に残る。敗れたモロルトは舟でアイルランドに逃げ帰り，間もなく死んでしまう。マルク王とコルヌアイユの人々は喜びに包まれた。コルヌアイユの子らはトリスタンによって永久に救われたのであった。

1299—1300　lez Erec s'est li cuens assis, et la bele pucele an mis　エレックの傍らに伯爵がすわった。そしてまん中に美しいおとめがすわった。――この表現は辻褄が合わないが，訂正せずテキストどおり訳した。

1319　Roadan　ロアダン。――おそらく北ウェールズのルドラン Rudlan を指す。

1327　veir et gris　銀りすの毛皮。――白色と銀色がまだらになっている。王侯貴族の専用品であった。シンデレラ姫の靴はガラス（verre）ではなく，りすの毛皮（vair）でできていた。同音語がもたらした混同である。gris はシベリア産の銀りす，またはその毛皮を指す。petit-gris とも言う。

1509　li botelliers　酒監。――フランスの宮廷の高官。ぶどう酒の管理および王領において販売されるぶどう酒に対する酒税徴集をその任とした。宮廷においては酒監は特許状や免許状に署名したほか，食卓で王にぶどう酒を給仕した。酒監の地位は，きわめて高く，宮廷の執事（chambrier）の前に席を占めていた。大蔵大臣の地位すらも，長いあいだ酒監に従属していたらしい。しかし，15世紀の初めに酒監の力は弱まり，やがて名実ともに消滅する。Étienne

Pasquier (1529—1615) は *Recherche de la France* (1561) の中で次のように述べている。「Grand-Bouteiller という名称は宮廷の役職であった。今日では，その思い出は宮廷で忘れ去られてしまったばかりでなく，bouteiller の仕事ほど低いものはない。それゆえ，今日，かような仕事に従事している人々は sommeliers と呼ばれている」。

1570 bliaut 寛衣。——袖つきの長い婦人用上着。襟と袖口に刺繍がある。男ものもある。

1579 plus de. IJ^{C}. mars d'or batu 200マール以上の金箔——。マールは金銀を計る旧単位。1マールは8オンス。

1598 la porpre プールプルの布地。——緑または黒，あるいは赤の名状し難い色彩の布地。毛皮で裏打ちされることがある。

1062 unes estaches de cinc aunes 5オーヌの結び紐。——オーヌは織物に用いる旧尺度。1オーヌは約1.2メートル。

1648—1652 qui fu tant avenanz et bele . . . 彼女はとても美しく感じが良かったので . . . ——qui の先行詞は une pucele (侍女) であるが，この描写は，v. 411—423 のエニッドの描写と矛盾している。

1674 Lancelot del Lac 湖水のランスロ。——円卓の騎士。湖水の貴婦人と呼ばれた仙女ヴィヴィアンヌ Viviane によって育てられたのでこの名がある。長じてグニエヴル王妃を熱愛し，王妃のためにあらゆる艱難辛苦をなめる。ランスロの苦難の物語は『車上の騎士』の中に描かれている。

1767 Pandragon, mon pere わが父パンドラゴン。——アルチュール王の父ユテール・パンドラゴン Uter Pendragon (英名ユーサー・ペンドラゴン Uther Pendragon)。

1796 ici fenist li premiers vers 第1の詩節はここに終わる。——この詩句の意味については大いに論議が行なわれた。Foerster は，vers を ≪chapitre≫ または物語の ≪partie≫ の意味にとったが，この物語に ≪chapitre≫ や ≪partie≫ の明白な区分があるわけではない。E. Hoepffner は，vers を ≪couplet≫ という普通の意味に解した。歌の最初の couplet は序の歌の役に

立つので，その場合の詩句の意味は「ここに物語の序が終わる」である。この詩句を≪premier strophe, premier couplet≫と解するならば，それは，おそらく比喩的な意味でしかない。すなわち「主人公の生活の最初の幸福な局面はここで終わり，苦悩と苦痛がこれから始まるであろう」という意味である。St. Hofer の推定では，le primerain vers とは，この物語の原初の形態であり，それをクレチヤンが彼の「首尾一貫した物語」(conjointure) に発展させたのだという。(M. Roques による。)

1807 de boqueranz et d'escarlates バックラムと赤い羊毛織物。——Boquerant（または，bogerant, bougerenc, 現代フランス語では bougrant）は，中央アジアのダッタン地方の都市ブカリア Boukhara で製造された丈夫なゴム引きの硬亜麻布である。現代のバックラムよりは良質であった。地名 Boukhara に由来する。ヨーロッパへの流入経路は未詳。Escarlates は羊毛または絹で織られた服地。最初は青色であったが，やがて深紅色に変わった。

1810 d'osterins オストラン。——東方原産の高価な絹織物。

1823 les besanz ブザン貨幣。——ビザンチウム Bysantium の皇帝によって鋳造された金貨。12世紀および13世紀のヨーロッパで広く用いられた。フランスでは王の祝別式のミサに13枚のブザン金貨を捧げる習慣があった。ブザン貨幣の価値に関しては定かでない。ジョワンヴィル Joinville は聖王ルイ Saint Louis の身代金として要求された20万ブザン貨を50万リーブルと見積っていた。René Louis の注によれば，1ブザン貨はツール貨幣の約10ソル（10 sols tournois）に相当するという。

1826 rëaume d'Estre-Gales エストルガル王国。——おそらくデストルガル Destre Gales, すなわち南部ウェールズを指す。

1840 les deniers ドニエ貨。——古フランスの貨幣。1ドニエは12分の1スー（sou)。メロヴィング王朝時代には，直径9ないし11ミリメートル，厚さ1ミリメートルの純銀の貨幣であったが，シャルルマーニユの治世には，直径15または18ミリメートル，厚さ半ミリメートルとなった。1ドニエはその当時2オボル oboles の価値を有した。封建諸侯たちは貪欲からドニエ貨の品位

を落とし，1100年頃には1ドニエ貨の重さは15ないし20グラン grains（1グランは54ミリグラム）で，銀よりも銅をたくさん含んでいた。当時，貨幣鋳造権を持っている都市と同じ数のドニエ貨の種類があった。13世紀以降のドニエ貨の歴史については，ここでは省略する。

1885 li cuens Branles de Colescestre グルセステールのブランル伯。——グルセステール Gloucester, 英名グロセスター Glocester。イギリスの地名。

1891 de Traverain トラヴラン。——ブラバン Brabant の公爵の居住地テルヴュラン Tervueren か？

1907 Morgant la fee 仙女モルグ。——アルチュール王の姉妹（異父姉妹）。v. 399の注参照。

1909 Tintajuel ティンタジェル。——Tintagel 英名ティンタゲル。コーンウォールの海岸の地名。アルチュール王の城がある。

1913 Garraz, uns rois de Corques fiers 勇猛なコルク王のガナス。——コルク Corque はおそらくアイルランドのコーク Cork を指す。

1915 cendax サンダル絹。——絹織物の名。ときには赤，ときには青の高価な絹地。

1917 un cheval de Capadoce カパドスの馬。——カパドス Cappadoce は古代小アジアの国。アルメニアの西にあった。

1942 Bilis, li rois d'Antipodés アンチポデスの王ビリス。——『セヴィリャのイジドール』*Isidore de Séville* に「リビアのアンチポデス」とあり，アンチポデスの人々はピグミー(小人族)と同一視されている（M. Roques による)。

1947 paume ポーム。——手のひらの幅の長さ。大麻などの茎に用いた尺度。

1964 comanda. C. vaslez baignier 100人の若者に入浴を命じた。——騎士叙任式の模様や仕草は，がいして曖昧模糊としており定かでない。時代，場所，状況，儀式執行者，被叙任者の家柄・財産・係累・野心その他により差

異があった。この詩句によれば，被叙任者たる若者（従騎士）は騎士叙任に先立って入浴し身を清めたのであろう。

1972 livres リーヴル。――フラン以前に用いられていた貨幣単位。リーヴル・トゥルノワ(livres tournois)とリーヴル・パリジ (livre parisis) の2種があった。リーヴル・トゥルノワは元来トゥール Tours で鋳造され，20スー (sous) に分けられ，1スーは，さらに4リアール (liards) または12ドニエ (deniers) に分けられていた。リーヴル・パリジはパリで鋳造された貨幣で25スー・トゥルノワに相当した。リーヴル・パリジは1667年に廃止された。

1980 L' arcevesques de Quantorbire カンタベリーの大司教。――仏 Cantorbéry, 英 Canterbury. イギリスの有名な古代都市。ケント Kent 伯爵領の首都。597年，ローマから派遣された聖アウグスチヌスが多数のケント人を改宗させ，この地に教会を建てて以来，イギリスにおける大司教区として宗教史上重要な役割を演じた。ノルマン人による征服後，トマス・ベケット Thomas Becket がカンタベリーの大司教に任ぜられたが，ヘンリーⅡ世との不和のため1170年に暗殺され，彼の遺骨は1220年にこの地の聖三位一体聖堂に納められた。中世には多数の巡礼を惹きつけた。カンタベリーの大司教は強大な力を持ち宗教改革後はイギリス国教会の総本山となった。

1984 menestrel 吟遊楽人。――中世に王侯や伯爵の城を巡って自作の詩を歌った音楽詩人。ménestrel という語は，のちに ménétrier（旅回りの楽人）という語を形成した。

1992 cil gigue あるものはジーグを弾き。――ジーグ (gigue) は用弓楽器。いなか風の小型ヴァイオリンの1種。同名のダンス≪ジーグ≫はこの楽器の名称から由来したらしい。

1992 vïele ヴィエル。――ヴァイオリンの前身であるヴィオル（3弦または6弦）に似た中世の用弓楽器。

1999 muses ミュゼット。―― musettes。数本のパイプと革袋でできている民俗楽器。中世に羊飼たちが好んで用いた。ブルターニュおよびスコットランドで用いられている風笛もミュゼットの1種であるが，パイプが2本しか

ない。

1999 estives エスティーヴ。——ミュゼットに似た吹奏楽器。

1999 freteles フレステル。——frestelle. 牧神パン（頭に角があり足は山羊に似て笛を吹く）が持っている類のフルート。斜めに切られ，徐々に短くなっていく数本のパイプが平行に並べられている。

2022-2023 la ne fu pas Enyde anblee, ne Brangiens an leu de li mise; エニッドが引き離されてしまうことはなかったし，ブランジアンが身替りにおかれることもなかった。——『トリスタンとイズーの物語』の思い出。イズーはアイルランドからコンウォールへ向かう船中で誤まってトリスタンとともに恋の秘薬を飲んでしまう。やがてマルク王はイズーを妻に迎えるが，腰元ブランジアンは海上で犯した自分の粗忽をあがなうため，マルク王とイズーの結婚の夜，イズーの身替りとなって，ひそかに新婚の床にはべり，おのが肉体を犠牲にしてイズーの名誉をかばい，その生命を救う。同じような伝承はシャルルマーニュの両親ペパン Pépin とベルト Bèrte の結婚，アルチュール王とグニエーヴルの結婚にも結びつけられている。

2055 jugleor ジョングルール。——中世の遊行芸人。中世に領主の城や市（いち）を巡り歩いた軽業師や楽人で，ときには猿や犬，あるいはよく訓練されたその他の動物を連れていた。彼らはカロリング朝の諸王の法令や公会議の議事録の中では Joculatores, Ministrelli, Golliardi, Ludicratores などの名で呼ばれている。いわゆる jongleurs は軽業師や道化師であったが，そのほか jongleurs de gestes（武勲詩のジョングルール）と呼ばれる人々がいた。彼らは領主の御前でトゥルヴェール trouvère（北仏吟遊詩人）の詩を歌い，その社会的地位は軽業師の類よりは遙かに高かった。

2075—7080 antre Erec, et Tenebroc . . . エヴロイックとテヌブロックの間で。——エヴロイック Evroïc はヨーク York をテヌブロック Tenebroc はエジンバラ Edinburgh を指す。なほ，この箇所では字本に混乱が見られ，意味が通じないので Mario Roques に従い次の訂正を施した。（1）Evroïc はテキストでは Erec となっているので Evroïc に訂正。（2）mes sire

Gauvains s'avança（ゴーヴアン殿は進み出た）は，テキストでは，et Melic, et Meliadoc（v. 2076）の後にあるが，これを前へ移した。（3）qui d' une part le fïança（一方の陣営のために誓約した）はテキストにはないが，これを挿入した。

2082 li tornoiz 騎馬試合。——中世の騎士時代に行なわれていた騎士の武術競技会。フランス語でトゥルノワ（tournois），英語ではトーナメント（tournament）と呼ばれる。騎馬槍試合（仏ジュート joute, 英ジャウスト joust）とは区別されねばならない。ジュートは，騎士が長槍をもって戦い，相手の騎士を馬から突き落すことにあったので，どちらかと言えば実戦である。その点，騎馬試合は平和的な模擬ジュートである。しかし，模擬試合とはいえ，トゥルノワにはジュートが取り入れられていたので，時には人を殺すこともあり，ために教会は再三にわたりトゥルノワを禁止した。とくに1215年のラテラン公会議と1279年のニコラウスⅢ世の禁令は有名である。

騎馬試合は中世の騎士道時代を彩る華やかな催しで，たんに相手を打ち負かすだけでなく，立居振舞や武術の技を見せるのも目的であった。また，さまざまな騎士道の掟を守ることが要求され，なかんずく礼儀作法が重んじられた。たとえば相手の馬を傷つけたり，相手の騎士が兜の緒を解いたのちに攻撃することは許されていなかった。

ヨーロッパのいくつかの国は騎馬試合の創始国をもって任じているが，騎馬試合は封建制と騎士道の自然発生的産物だったようである。試合場には一般に領主の城に隣接する土地が選ばれていた。闘技場は一般に細長い楕円形の地域で，その両側が観客席となっていた。楕円形の一方の先端には鉄製の柵があり，そこを通って騎士は競技場に出入りし，もう一方の端には審判席が設けられていた。試合に臨む騎士は，それぞれ自分が仕える貴婦人から贈られたスカーフ・ヴェール・袖衣・腕輪などの貴婦人の持ち物を身につけていた。これらの品はファヴール（faveur, 英フェイヴァー favour）と呼ばれ，v. 2085—v. 2087の記述にあるように貴婦人たちが愛のしるしとして贈ったものであり，戦いにおいて騎士の励ましとなったのである。

2097 blazon 楯。——12世紀には≪bouclier≫の意味で用いられていた。boucle（尾錠）は楯の外側の中央の突起を指すが，そこから bouclier が生じたと思われる。

2163 devers lui fet l' estor fremir 彼の周囲では戦いが激しくなる。——Foerster によれば，v. 2163以下ではエレックが問題ではなく，ゴーヴァンが問題になっている。なぜなら v. 2159—60に「エレックは馬や騎士を捕えることに注意を払おうとはしなかった」とあるから，v. 2163 以下の主語をゴーヴァンとしなければ，「彼は馬や騎士を捕えていた」（v. 2166）は矛盾である。しかし，M. Roques は，エレックは馬や騎士を捕える意志がないが，彼の連続的な勝利によってそれらを手に入れるのだと解釈する。

［未　完］